

日米比較研究ノート

文化心理学と異文化間比較

清泉女学院大学 東 洋

A Note on US-Japan Comparison Study

– Cultural Psychology and Cross-cultural Comparison –

Seisen Jogakuin College AZUMA, Hiroshi

異文化間の比較, 殊に日米比較のような2国間の比較について, 文化心理学の方法としての妥当性を疑問視する意見に対し, 文化の重層性, 文化の単位としての「国」の生態学的妥当性, 2国比較が必ずしも文化2分法を意味しないこと, 過去の文化の影響がかなり持続する側面があること, などを切り口にして文化心理学における異文化間比較の意義を論じる。

【キー・ワード】文化心理学, 異文化間比較, 国間比較, 文化2分法

Recently, some cultural psychologists question the adequacy of cross-cultural comparison as a method of cultural psychology. The author makes a counter argument making reference to the multiphasic nature of cultural influences, the ecological validity of nations as cultural units, the difference of bi-cultural comparison and cultural dichotomization, and the temporal durability of some layers of cultural influences.

【Key Words】Cultural psychology, Cross-cultural comparison, Cross-national comparison, Cultural dichotomization

日米比較研究の動機

私は過去30年ほどにわたって, 主として日本とアメリカの対比を軸に異文化間の心理学的比較をおこなってきた。その動機は必ずしも心理学の理論からみちびかれていたわけではない。まず, 日本人の行動の仕方や社会的な判断の仕方の一般的傾向に米国のそれとかなり違うところがあるという, 経験的認識があった。さまざまなカルチャーショックの体験の結果として私は, その違いに生育環境の文化にかかわるシステムティックな基礎があると考えた。それを「進んだ - おくれた」というような序列化でなく, 両文化がそれぞれに異なった状況をマスターするために適応をとげてきたものとして比較してみたかったのである。そして, それぞれの国で発達的に刷り込まれ, 当たり前とされている行動の適否, 善悪の基準に, 国の間では違いがあるのだということを, 人々が価値判断を急がずに認識するのが重要だと考えた。この関心は発達心理学から派生したもので, 日本人とアメリカ人との

社会的判断の仕方の差異を印象づけられていた私は、そういう差異がどういう文化的条件に依存するかを知りたかったのである。10年ほど前に上梓した「日本人のしつけと教育」(東, 1994)は、1972年以来の日米比較研究を中心にその後に行なった研究を加え、江戸時代の社会制度に適應した心性と初期資本主義の開拓社会に適應した心性という視点から解釈してみたものだった。

最近になって、「児童心理」誌上での書評シンポジウムのテーマに選ばれ、何人かの人が評論をしてくれた(2003年6月刊行予定)。いわゆる文化心理学が盛んになるに伴い、異文化間比較にしばしば方法論的な疑義が出されているが、その流れを反映しての方法論的な問題提起が多かった。雑誌の紙数の制約で答えきれなかったもので、それ以外の場での批判も考慮しながら、異文化間比較は文化心理学の重要な方法であり続けるという立場で方法を論じてみる。(児童心理誌に書いたものとの文章の重複も若干あるが、この事情で御宥恕いただきたい)。

文化の重層性

文化心理学は国間比較から脱皮しなければならないという議論は、うなずかせるものがある。確かにA国とB国の間でこのように行動の仕方や心理学的な諸徴標の値が異なるというだけの異文化間比較がなかったわけではなく、そこでとまってしまったならば好奇心の対象とはなりえても学術的に不毛である。だが異文化間比較が文化と心理発達の関係になんらかの洞察を与えたとしたら、または将来の行動の予測やそれへの対応になんらかの情報を加えたとしたら、その意味を否定するべきではない。

過去の、「悪しき」比較文化心理学について、波多野・高橋(1997)は端的に、「比較文化的方法とは「同じものさし」で異なる文化における心の発達を測り、その結果を文化の違いと関係づけようという方法」で「欧米と、これとはできる限り異なる文化で得られた反応の分布や平均値を直接比較し、文化による心の「差」を論じていた」と述べる。これが問題である理由は第一に異なった文化間で同様に妥当な「同じものさし」が存在するかということである。質問紙のように言葉に依存する「ものさし」の場合に言語を異にする文化の間で等価なものをつくるのが困難なのはわかりやすいが、たとい、それを何かの方法で克服し得たとしてもそれでは片付かない。指示的な意味では「同じ」対象として理解されていても、それが異なった日常生活文化の文脈に埋め込まれた時の意味はちがってしまう。

実際の生活の文脈での意味のある研究の必要性は波多野・高橋(1997)も述べているが、その立場からする比較文化心理学に対する批判のもっとも代表的なものとしては、Cole, M. (1996)をあげることができる。最近その全訳に解説をつけたもの(天野, 2002)も出た。彼は精神の発達は積極的な活動の文脈の中で生じ、領域固有的であり、歴史的に形成された文化が媒介する人との相互作用によるとする。その立場から、標準的な比較実験は具体的な生活環境に対する適切性を欠くと指摘し、発生、発達の過程を具体的な活動の文脈の中で綿密に観察することを推賞する。したがって、一般的な調査や、「文化」を独立変数、行動を従属変数とするような実験心理モデルの研究に疑義を呈する。

私は波多野・高橋(1997)の批判が当るような比較文化研究が過去、殊に1970年代前半までにおいて多かったことは認めるし、コールの考えにかなうような研究はできれば理想的であり、やって一番手ごたえが感じられて楽しいだろうとも思う。だがその故に異文化間比較を心理学の研究法から除

いてしまうことになったら大きな誤りであると考える。

いうまでもなく、人は文化の中で、文化をとりいれながら成長する。広い意味では人の作り出したもの一切が文化で、歴史も、道具も、芸術も、思想も、概念も、みんな文化の構成要素である。そして、文化は生き物で、変化したり成長したり衰退したりする。そのような文化の変化を作り出すのは文化のなかに生きる「人」である。つまり、人の心と文化とは、互いに分けられないかたちで、いわば共生体として成長や変化をとげてゆく。どちらかをどちらかの原因とすることは出来ないが、文化的条件と行動、ないし心性の相互構成による共変関係は、文化的条件を異にする集団間での、行動の平均的傾向や分布の差としてあらわれる。行動の群間比較が、群あるいは行動のどちらかを独立変数を決めてかかっていることにはならない。 $P=f(C)$ というのは、 $C=f(P)$ ということでもある。

この関係は、個人と文化という水準でも存在する。誰でも自分のまわりに、また自分の内部に文化環境を持っている。居住環境、知識、教育、まわりの人たちの影響、その人のものの見方、考え方などが、その人が自分のまわりに紡ぎだしている文化である。その人の心と、その人をくろみこんでいる文化とは、分離できない。当然、個人的な水準で発達過程を丹念に追って、文化と個人の相互作用を見ることが出来る。微視的にはその方がはっきりした像を結ぶかもしれない。しかし見えてくるまでに時間と手間がかかる。どういう相互作用があるかに見通しをつけるヒューリスティックとしては、異文化間の心理学的比較が有効な手段となり得る。

波多野・高橋(1997)、或いはコールの批判は、つきつめれば異文化間比較のみでなく個人間の比較にもいえることであることを指摘しておこう。人と文化の相互構成 (co-construction) を認めるならば、それぞれの個人が自分のまわりに独自の文化環境を紡ぎだしているはずである。誰もが重層的に多様な文化のもとにある。家庭の文化、故郷の文化、居住地域の文化、職場の文化、職業集団の文化、親しい仲間の文化、信念や宗教に基づく集団の文化など、そのいずれにも属している。異なった個人の間で、その重層構造のすべてがかさなることはまずないので、各個人が何かの意味で異文化の住人である。そして厳密な意味で個人における文化を理解しようとするれば、発生、発達の過程を具体的な活動の文脈の中で綿密に観察することが必要になる。集団的傾向の比較は、文化のある層を取り出しているの比較にならざるをえない。そしてその場合、たとえば質問紙項目の一つ一つが個人間で同じ意味をもっているという保証はない。だがその故にテストによる、質問紙による、または統制された実験による個人間の、或いは群間の比較が無意味だということになるであろうか。各個人に対する意味のこまかいひだは異なっても、意味の上で十分な重なりがあれば、個人間及び集団間の比較は意味をもつ。勿論項目作成や実験条件の計画にあたって、この「重なり」が十分であるように配慮する必要があるのはいうまでもないが。

私は波多野らやコールのアプローチ、特にエスノグラフィ的な日常生活の具体的な場面での行動観察に積極的な意味を認めるし、本音を言えば、もしあと10年の研究者生命が私に与えられるものならばそういう試みもしてみたい。それによって開ける新しい視野は魅力的であろうと思う。けれども、それは文化心理学の方法としての異文化間比較を否定する理由にはならない。日常性の中に入り込めば入り込むほど、文脈が複雑にからみ合い、一般化しにくい記述に終わる可能性が高まる。深い省察を欠いた安易なサンプリングによる文化比較は勿論克服されなければならないが、そのような

「這い回る状況主義」もまた自己満足にすぎないものになり得る。「比較文化心理学から文化心理学へ」というスローガンはわかりやすいがあまりにポレミッシュである。異文化間比較は、その限界に充分な注意を払って行なわれる限り、文化心理学の重要な方法でありつづけると私は思う。

国々の間の比較について

もうひとつ、国々の間の比較を文化間の比較とするのはおかしいという批判を聞くことがある。たしかに国々の境界はしばしば政治的ないし人為的である。また、一つの国々のなかにも幾つもの文化圏が存在するし、一つの文化圏に幾つもの国々がくられることもある。一方、文化圏の定義も多面的である。文化のどの面、どの層、どの軸によって定義するかでいろいろな仕分けが可能である。

だが、国々はしばしば風土、歴史、社会組織、主要な生産手段、また支配的イデオロギーをくくる存在である。また、国々や民族は歴史的に通婚圏を規定してきたので、それぞれに遺伝子のプールを形作ってもいるし、文化の素子の分布についても独自性を持っている場合が多い。それらの主要な幾つかにおいて目立って異なる国々間では、さまざまな行為のスク립トの分布状態が違うのは当然である。そこで第一近似的に国々間を比較するのは、更に細かい分析でフォローアップされるべきことを前提とすれば、そして国内のどのようなサブカルチャーをサンプルしているかの情報が明確にされているならば、いろいろな意味で経済性の高い研究方略であり得る。

これと関連して、何ゆえに日米の比較か、という疑問を投げられることもある。確かにいろいろな国々の間の比較が可能であり、それなりに意味があるだろう。私について突き放して言えば、本稿のはじめにも述べたように、日米比較にかかわったのは、日本で生まれ育った私がアメリカに留学したり暮らしたりして、そこで文化の影響を実感したという「偶然」である。このペアを特に取り上げるべき学問的必然性に基づいて注目したわけではない。けれどもいろいろある偶然のなかでこの偶然に反応した理由は、ひとつには最近まで、そして恐らく今も、アメリカの心理学が心理学の主流を占めていることである。その故に、現代心理学にアメリカないし欧米文化に内在する文化的盲点があると考え、非アメリカの日本を対置してみることでそれをあぶり出せるのではないかと考えた。そして長い「鎖国」をつづけて熟成した日本の社会文化と進取開拓を標榜して開花したアメリカ社会文化とはきわめて対照的でありながら、識字率などの民度や、生活上のゆとりなどの差が歴史的に、他の欧米国と非欧米国の間のように大きくない。そのため、それらの交絡を少なくした形で異文化間比較ができる。

もうひとつは、異文化間比較をおこなうならば、まず両文化について、その生活をよく知っていないければならないと考える。完全にバイカルチュラルというのは無理でも、一般の人々と日常生活の水準で交流し共働し競争した経験を（少なくとも共同研究者の一人は）持たなければならぬ。日本はともかくとして、アメリカ以外の国々については、私はそのような経験を持たないので、手をそめられなかった。

けれども2国間比較ではどうしても差異に注目することになるのは重大な限界である。一卵性の双生児がよく似ているといっても、それは他の人との比較があつて初めて認識されるもので、二人だけをくらべたならばやはり差異に注目することになる。これを克服するためには多文化間比較や、文化内変動と文化間変動の比較などが必要になる。

2 分法について

2 国間比較に対し、文化 2 分法につながるものとしての批判もある。2 分法が総て誤りとは言えないと思うが、比較的単純に定義された二つのカテゴリーに全人類を分けようとしたならば無理がおこるのは自明である。2 者の対比は確かに、その研究の対象とする世界の限りでは 2 分法にならざるを得ない。A グループと B グループを比較する時、(A+B) の世界に関する限り 2 分してかかっているのは当然である。それだからといって、A, B を対比することが (A+B+C+D+・・・+Z) の全部を 2 分していることになるわけではない。たとえば個人主義対集団主義というのはよく議論の対象となる 2 分法である。Triandis (1988) の場合、それは 2 分法というよりも沢山の中間段階をもつ一本の軸の両端という概念化であるように思われる。そうであるとしたらひとつの軸を通しただけでは、2 分法というのにはあたらない。Markus & Kitayama (1991) の場合はあたかも 2 分しているかのような表現をしているところがたしかに気になるが、よく読めば、彼等はやはり多くの中間型を許容する自己観の軸の両極として個人主義と集団主義をとらえている。ただそのひとつの極の周辺に欧米をおき、いわば特化させたために、2 分法の観を呈してしまった。仲間と自分とがある程度融合した自己観は、恐らく人間の種としての属性であり、その意味では原初的な集団主義は人間本来のものである。けれども人間社会が発達し複雑化すれば、自然的な集団から個人をひきはなす別の集団組織が生じ、そこに何かのかたちの脱(原初)集団主義が起らざるを得ない。ギリシャ思想や一神教の上に、プロテスタンティズム、ルネッサンス、産業革命、初期資本主義、植民地開拓主義などの歴史的な経過、つまりいくつもの必然と偶然が重なって発達した西ヨーロッパ、アメリカの個人主義は、脱集団主義のひとつのかたちであり、アラブにも、中国にも、そして日本にも、それぞれの形の脱(原初)集団主義が進行したと私は考える。Markus らはその欧米型脱集団主義を特に個人主義とよび、他を一括して集団主義とし、両者を対比させた。だが、彼等のよぶ集団主義は実に雑多な内容をふくむことになる。これが大きな視野と優れた洞察で研究の新局面を開いた一方、すくなくとも controversy を呼んだ理由でもあろう。

私の 2 国間比較は、はじめから何かの概念で 2 国を対比させてかかるのではなく、生活や思想の上での歴史的な経過を異にする 2 集団の比較である。当然、3 国またはもっと多数の国の比較が出来ればより望ましいわけだが、すでにのべたように一人の研究者が生活的な水準で経験し、かつある程度理解のいく範囲はかぎられている。

歴史的な影響がどれほど持続するか

「考え方も行動もどんどん変わっていくし、グローバルになってゆくのに、差異を強調し過ぎていないか」「歴史的な影響がいつまでもつづくものではないのではないか」などという批判もしばしばあった。「こういう研究は折角進歩してきた社会をうしろにひきもどそうとするものだ」というあるかなり著名な心理学者のイデオロギー的発言は心外慮外であえて相手にする気もしないが、時間的な変化の速度は問題とする態度や行動の層によって異なると思う。風俗や、知識と意識的なコントロールに依存する行動、イデオロギーなどは本当にころりと変わることがある。けれども日常的なしつけが内面化された態度や、社会的思考と決定の傾向などは、それほどには変わりやすくない。江戸時代

はもう150年も前に終わったというが、私の祖父母は明治前の生まれで、直接に、また父母を通じて、私の「しつけ」に少なからぬ影響を持ったし、そのある部分はまた私を通じて、今もっとも社会的影響力の強い中年という年齢にさしかかっている私の息子にも影響していると思う。150年は長過ぎる間隔ではない。文化的に蓄積された行為スクリプトの分布型は、新しい状況のもとで新しいスクリプトが加わり、また入れ替わり続けても、おいそれとは巨視的な形を変えはしない。

そして、文化の中にも変わりやすい面と変わりにくい面とがある。異文化経験の中で起る、カルチャーショック的に急激で広い異文化性の認識には、文化の三つの面を区別する三段階があると経験的に思う。第一の水準は異文化接触の初期に、風俗習慣、生活条件などの目に見える大きな違いを集中的に認識する段階である。この場合は、そういうものだと思って慣れてしまえば、違和感は比較的容易に克服される。そして母国でのしごらみや因習から自由になれる異文化生活を楽しみさえる。これを「visitorの水準の異文化認識」と呼んでみよう。人や文物の往来が盛んな昨今では、アメリカとの間でははじめからあまり異文化性を感じない人も多いかもしれない。

第二の水準は、異文化での実生活に参与してある程度年月がたったところで、生活場面でのいくつかのバイタルな競争や葛藤や行き違いをネゴシエートしなければならない経験を経た所でじわじわとやってくる。これを「residentの水準の異文化認識」と呼ぼう。社会的な意思決定や判断をささえる目に見えない枠組みの違いの実感による。たとえば親族に対する感じ方、考え方などで、自分とは随分違った社会化の背景を持っているなど思う。そういう実感について、私の経験した例をあげてみよう。私的な会話だったので、誤りを含むかもしれないが、あるアメリカ人の友人のお宅を訪ねた時、老いた愛犬がいて家族のように愛されていた。その友人はなでやりながら「この犬は妙なくせがあって、よくハイウェイのまん中に寝そべる。そのうち車にひかれて死ぬだろう」という。びっくりして「それは心配でしょう」と言ったところ、「それが彼の生き方なのだから干渉する気はない。」という返事だったのである。ここまで「相互独立的」なのかと思った。一般的な例ではないだろうが、象徴的な例だと思う。こういうことに集中的に気付く段階を経て、異文化の人の感じ方や考え方の中の「異質性」を理解し、しかも「わかる」という意味で共感できるようになる。

第三の水準は「returneeの水準」と呼んでみよう。母文化環境に復帰した時に、自分の「個人的文化」が母文化からかなりずれてしまっているという実感をもつことによるショックである。自分の中での「文化の綱引き」(高野, 2003)の実感といってもよいかもしれない。文化は多元的であるから、この綱引きは一本の綱の両端を引くのではなく、いろいろな方向に綱が伸びている綱引きである。この認識を通じて「文化の個人性」が印象づけられ、ステレオタイプとしての異文化観からある程度自由になる。

私の経験の整理から思い付いたことで、まだよく考えをつめていないし、個人差も大きいだろう。もっと感受性の高い人はごく短期間の間に returnee の水準まで及ぶのかもしれない。ともあれ、異質性の認識は異文化を異化するのではなく、理解し同化する素地をつくるのだということも指摘しておきたい。そして、かなりの人から「今はそんなに違わなくなっているのではないか。」と指摘されたが、それはどの層での異文化性を問題とするかによると言いたいのである。第一の水準はかなり変わりやすい。第二の段階で認識されるような面はより変わりにくい。そして第三の段階で不易と流行が

見渡せるのではないだろうか。

私には、多くの日本人が、第一の水準を比較的軽く乗り越え、その先のショックに行き着かないままで、わりあい安易に「国際化」してしまっているように見え、文化差がもう少し、しぶとい根っこを持っていることを示したかった。特に我が国の知識人によくあるように、第一の水準をほとんど感じないで欧米文化に順応した場合、その奥での、より根の深い文化の構造的な差を見のがしてしまうことがある。その水準での違いを指摘し、かつどのような社会化の違いによってその差異が生じるかを考えることが必要だと思った。

状況変化にもかかわらず、ある種の文化特性はかなりロバストだと考えている。文物、風俗、意識化された思想、社会経済的条件などは第一の水準の認識の対象で、かわりやすくまた共有されやすい。だが愚痴の理由、怒る理由、効果的な意地悪の仕方、説得の根拠などの文化的特徴はそうたやすくは変わらないというのが第二、第三の水準を経過しての実感であり、上述の考えはその実感からの帰納である。そうして、文化間の差別や誤解等は、しばしばそういう水準での差異の理解を欠くことにもとづくのではないかと思う。

文 献

- 東 洋. (1994). *日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて* (シリーズ人間の発達 12). 東京：東京大学出版会.
- Cole, M. (2002). 文化心理学 (天野清, 訳). 東京：新曜社. (Cole, M. (1996). *Cultural Psychology: A once and future discipline*. Cambridge : Belknap Press of Harvard University.)
- 波多野誼余夫・高橋恵子(編著). (1997). *文化心理学入門*. 東京：岩波書店.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 高野洋太郎. (印刷中). 書評 1 文化差-実在するものと語られるもの. *児童心理* 6月号 東京：金子書房
- Triandis, H.C., Bontempo, R., Villareal, M.J., Asai, M., & Lucca, N. (1988). Individualism and collectivism: Cross-cultural perspectives on self-ingroup relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 323-338.

